

4 4 年振りの幸運な再会

—このエッセイは、リタイア直後のフィレンツェ旅行について、10年前に書いたものです—

S 4 0 年経済 黒田直隆

4年前の夏、女房とフィレンツェを訪れた。一番好きな料理を最後に食べるのと同じ理由で、一番行きたいところを最後に残してきた。フィレンツェは、21歳の時、初めて海外旅行をした思い出深い町だ。

しかし65歳を迎え、何時、海外旅行が体力的に出来なくなるかも分からないと思ひ始め、ついに行くことにした。

この旅の最大目的は、当時1週間滞在した懐かしい宿を訪問することだった。可能性はゼロに近いだろうが、出来れば当時の女主人に会って、泊まった部屋を見せてもらいたいという思いがあった。ただ、まだ同じところに住んでおられるか？ まだご存命でおられるか？ 等に不安があった。

また、彼女の写真はないので、果たしてお会いしても、本人と確認できるかは自信なかったが…。

昭和38年、大学3年の夏、大学生仲間とのグループ旅行だった。羽田から南回りのプロペラ機でチューリッヒに飛び、汽車でミラノ経由着いたのは、日本を出発して3日後だった。今では考えられないほど日数がかかった。

当時の私の日記に、フィレンツェの印象と、滞在した宿の記述がある。その一部を下記に抜粋する。

～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～

フィレンツェに来て印象深かったのは、建物の高さが統一された石造りの町並の美



ペンシオーネの入口（当時）

しさと、女性の美しさ。ナマで見る白人女性は誰もがグラマーなのだ。

女優のジーナ・ロロブリジーダやクラウディア・カルディナーレ並の美人が至るところにいる。若い女性と道ですれ違ふと、何の期待もできないことが分っているのに、「ボン・ジョルノ」と声をかけてはドキドキした。

私達の宿はペンシオーネと呼ばれる下宿屋（安宿）。4階建ての古い建物で、入口の真上にバルコニーがある。まるで、『ロミオとジュリエット』の舞台のようだ。

最上階が下宿屋になっている。部屋の窓から見える向かい側は、石造り建築で赤

い屋根で統一されている。初めての外国なので、中世風の町並だけでなく、室内の大きな白いスタンド、花模様のベットカバー等も日本で見たことがなく珍しかった。

帰国後友人に自慢したいと思い、若くはないが下宿屋のメイドさんの写真を撮らせてもらった。



宿泊した部屋

40歳後半の女主人ペレグリーニさんは優しく上品で素敵な人だった。だが、気の毒にも未亡人なのだ。イタリア語以外に英語とフランス語を流暢に話すインテリだ。スタイルの良い、すこぶるつきの美人なのでもう少し若かったら……と残念に思った。

ところで、フィレンツェは通行人、商店、料理屋等、どこでもほとんど英語が通じない。料理屋のメニューもイタリア語に加え、フランス語か



メイドさん

ドイツ語のどちらかしかない。

もともと、食事はレストランでなくトラットリア（安食堂）だったからだろうが……。

それにしても、イタリア人は陽気でおしゃべりだ。トラットリアで、ジャポネーゼと分かると給仕達が集まってくる。「日本のキャノン素晴らしい」「日本女性はきれいだ」「シナと日本は違う。シナの右に



毎日訪ねたトラットリア・フィレンツェ

ある小さな島が日本だ」「日本にはトーキョーがある」とか、盛んにうんちくを披露する。時折、周囲の客も仲間に入ってきて、あゝだ、こうだと口を挟む。私がイタリア語を理解出来ないと知りながら、言いたいことを全部言うのだから面白い。

～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～

44年振りのフィレンツェ。中央駅からタクシーに乗った。ホテルで入手した地図は中心街のものなので、ペンシオーネの住所は範囲外だった。

従って、頼りは日記帳に書かれた住所と、持参した当時の破れかけの地図しかなかった。こんな心許ない手がかりにもかかわらず、運転手は探し当ててくれた。私は大いに感謝し、「グラーツェ」と言ってチップをはずんだ。

現地に着いて、驚くとともに感激した。建物だけでなく、ペンシオーネ前の小川も全て昔のままなのだ。小川の水際は、当時と変わらない背丈の草木で一面覆われていた。わずか数年でも、景色が一変することがある日本とは大違いだ。



ペンシオーネ前の小川

建物1階の入口の門扉はピタッと閉ざされていた。人が出入りする気配もなかった。両開きの分厚く頑丈な木製の門扉は、高さ4メートルほどあり立派なものだ。入口付近のたたずまいも、当時の写真と見くらべたが、全く変わっていなかった。

『さてどうするか?』と、しばらく思案した。『何か手立てはないか?』と、入り口付近をウロウロした。その時、不審に思ったのか、突然一階の窓から太ったオバサンが顔を出した。私はこれをグッドチャンスと思い、「ペレグリーニさんを知らないか?」と英語で質問。するとオバサンが大声で叫んだ。イタリア語は分からないが、「あんた達、何者? とっとと立ち去りなさい」とでも怒鳴ったようだ。でも、ここで退いたら元も子もないと思い、私も負けずに日本語でわめいたら引込んだ。

その後、一呼吸置いて興奮がおさまってから、再び玄関付近で手がかりを探した。

すると、門扉の右壁に横30センチ縦40センチのしゃれたデザインの銅板が見つかった。



壁の銅板の表札

そこに、ごくごく小さな字で10人の名前が書かれていた。それは表札だった。

その中にペレグリーニという名字を発見した。私は「やった！」と叫んで、すぐさま呼び鈴を押した。本人でなくても、お子さんか、少なくとも親戚には違いないと思った。それで、インターホンに向かって、下手な英語で訪問の趣旨を懸命に説明した。

すると、イタリア語で話す女性2人の声が聞こえた後、カタコト英語が聞こえてきた。

私は意味を聞き取れなかったので、黙っていると、そのうち静かになってしまった。その静寂の間は長かった。

何とかしようと粘っていた私も、女房が「迷惑だから帰りましょう」と促すので帰りかけた。と、その瞬間、突然ビーと音がして、突然目の前の門扉が開いた。しかし人の姿はなかった。誰かが遠隔操作で開けてくれたようだ。中に入ると、正面の薄暗い中に、手で扉を開ける方式の旧式なエレベーターが見えた。中に入って扉を閉めるまでは良かったが、動かし方が分からないのでじっと立っていた。その間はほんの一瞬だったが、心細かった。

すると上で操作したのだろう、前触れ無くガタンと10センチほど一度下がってから、ギーギーと音を立てて、逆に昇りだした。思い出してみれば、このエレベーターも当時のまま変わっていなかった。

4階に着いてエレベーターの扉を開けると、杖をついた上品な老婦人と中年女性が立っていた。顔はうろ覚えだが、入口の門扉を開けエレベーターを動かしてくれたことから考えて、老婦人がペレグリーニさんだと確信した。中年女性は、後で知ったことだがメイドさんだった。

私は、先ずアポ無しの突然の訪問を謝罪した。その後、持参した当時の写真数枚を見せ、覚えている全てのことを夢中で話した。メイドさんのカタコト英語の通訳のおかげで、どうにか会話が成立した。

92才という彼女は、「私が生きているとは思わなかったでしょう」と冗談を言った。

彼女は、残念ながら最後まで私を思い出してくれなかった。ただ、その頃日本人学生のグループを泊めたことは覚えていた。

当時の日本は、外貨不足のため海外渡航が厳しく規制されていた。従って、日本人自体が珍しかったので、記憶に残っていたのだろう。

彼女は再婚もせず、子供もなく、1人住まいだった。飾り棚に、若い時の彼女夫婦と彼女の両親の白黒写真があった。4人とも理知的で上品だった。彼女は飛び切りの美人なので、女優のようだと誉めたのだが、意味が通じなかったようで嬉しそうな顔をしなかった。

写真のご主人が帽子を被っていた。「ふざけて私の帽子を被ったのよ」と説明した。おどけ者の夫だったと、懐かしそうに微笑んだ。その時、ふと幸せだった新婚時代を思い出したのではないか。少なくとも私にはそう思えた。私も共感して嬉しくなった。

私が滞在した部屋を見せてもらった。信じられないことだが、ベッド、机等の調度品は当時と同じものに見えた。真向いの建物も、持参した当時の写真と見くらべたが寸分も違わなかった。



真向いの建物（当時）



真向いの建物（今回）

市条例により、建物の建替えが一切ないようだ。古都フィレンツェは時流に乗らず、悠久で変らない町なのだ。その変わらないことだけで、心が癒されるような気がした。

ちなみに屋上に登らせてもらおうと、くすんだクリーム色の建物と赤褐色の屋根に統一された町全体が日に照らされ浮かび上がった。また、たまたま遠くから寺院の鐘の音が響いてきた。ここまで舞台装置が整うと、より明確に当時のままであることが証明された気がした。



屋上からの市街地（遠くに有名なドゥーモ）

一方、僅かだが44年間で変わったこともあった。

女主人が、猫背になり背が縮み白髪になったこと、英語をすっかり忘れてしまったこと。また、両開きの門扉が新しくなったこと。当時は鋼鉄製に見える黒色だったが、今は一目瞭然木製と分かる明るい色に変わっていた。そして、マロニエの街路樹が大きくなったことぐらい。これらは、当然年月とともに生じる変化なのだ。

その他のことが全く変わらないということに、イタリア人の価値観を垣間見る気がした。

しかし考えてみれば、今回の奇跡的な再会には、数々の幸運の積み重ねがあった。

その1つは、市町村合併や町名変更がなかったこと。だからこそ、当時の日記に書き残した住所と、当時の地図で行き着けたのだ。

第2に、幸いなことに彼女がご存命で、かつ転居していなかったこと。

第3に、その日のメイドさんの存在。期せずして、その日が初出勤だったそう。しかも英語を話せるので、その日の通訳をしてくれた。インターホンからイタリア語が聞こえた後静寂が続いたので、私が帰ろうとした時、メイドさんが入口を開けて良いか相談していた時だったそう。言葉が通ぜず、得体分からずの外国人を警戒するのは当然だった。

そして、第4の極めつきの幸運は、たまたま、その日がフィレンツェ大学の紹介で日本人留学生が下見に来る予定日だったそう。その留学生かと思ったので、女中に入口を開けさせたとのこと。

小一時間過ごした後、彼女宅を去る際、ハグされた時は年甲斐もなく恥ずかしかった。彼女の見違えるように太った身体は、ホンワカと暖かく雲のように柔らかかった。また何時会えるか分からないと思うと、胸が熱くなった。一方では、長年自

分に課した宿題を済ました気がして、清々しい気分になった。

「アリベデルチ」を繰り返して別れを告げた。

帰国直後に、龍村織りのテーブルクロスを送ったが、礼状は来なかった。その後も、毎年クリスマスカードを出しても、1回も返事が来なかった。英語での返事が煩わしいのか？ 気力が萎えたのか？ あるいは、何か？

彼女の居間で撮った写真は、今我が家のリビングに飾ってある。

真ん中に座った彼女が、私と女房の肩に手をかけ、にこやかに微笑んでいる。

彼女のご健在なのだろうか？



ペレグリーニさんとの3ショット